

〔1992年を読む〕

提 言 2

「生活大国」日本へのグランド・デザイン

— 19番ホールは三代目が主役 —

木下 知己（社会開発研究部長）

わが国の新しいコンセプト「生活大国」の理念と意義を

- 生活大国の目標とすべきことは、国際社会で歓迎される国家を築くこと
- 自国の生活文化を確立し、相手国の生活文化に理解を示し、共存協調で新しい世界秩序の形成に寄与すること
- わが国は戦後約半世紀を経過し、新しい世代が主流となりつつあり、この時期に生活大国を掲げることは、非常に意味あることと認識し、それらの実現に向けてわが国のパラダイムと展開方策を考察する。

〈国際社会の構成員として〉

ゴルフは、18ホールまでのゲームのおもしろさと、その後19番と称されるクラブ・ライフの楽しみをもって、ラウンドが終了すると言われている。ちょうど日本は、第二次世界大戦後、45年間を18ホールのコースにおいて経済的基盤づくり中心の国家運営を図り、国際間のゲームを競い合い、今日では経済大国の仲間入りを果たすまでに成長してきた。いよいよ19番ホールにさしかかり、日本のプレーを国際社会がかたずをのんで注目しているところである。

ゴルフの19番ホールでは、老いも若きも一緒になって開眼と失意の経験から出てくる技術論からプレーヤーの人生観や人生哲学など人生論へとゴルフ談義は盛り上がり、時のたつのも忘れるくらいである。ここでの語らい

が明日のラウンドへ希望をつなげてくれる糧でもある。

一方国際社会の19番ホールにおいては、価値観を異にする多様な民族が、異なった生活文化をベースに交流を行い、常に新しい世界秩序の形成について模索し続けているのが現状である。

その中であって、外国人の間には、日本人は西欧の論理に則り議論できないので、仲間はずれにしても仕方ないと主張するグループ、つまりリビジョニスト（日本異質論者）の意見がある。日本人は、自分の生活文化と相手の生活文化を認識し、その間の差異を認めることのできる論理的思考や議論を経て、その結果生まれるであろう共生関係を理解することのできる国民とは言い難いと評価されているからである。このような意見に日本も耳を傾け、「寄らば大樹の陰」「長い物には巻かれる」的体質を反省し、主張すべきは主張し、粘り強く相手を説得し、また相手の主張に対して自分も納得し、相互に信頼し合える関係を構築していくことに価値を見出す時期にきていると言えよう。

日本が国際社会の構成員としての義務を果たすには、日本のアイデンティティつまり生活文化を前面に出し、相手に理解させるとともに自分も相手を理解し、合意を得た上で国際関係づくりに努力していくことが望まれる。生活大国実現のために、日本は何を為すべきか検討することが重要と思われる。

〈急げ!“個”の確立〉

・個性的な生活者

生活様式の高度化、余暇時間の増大、高齢化社会の進展、価値観の多様化等成熟社会到来で、生活者個々人がそれぞれの生き方、考え方で多様な行動を起こすようになってきている。これらを規定する要因の主要なものに、生活者の必要として出てくる要求と、生活者が設定する生活時間資源の配分（生活シーン）として出てくる要求とに分けられる。近年の生活者の行動パターンは、後者の生活シーンに注目されるケースが多くなってきている。例えば、子育てが終わり家事労働から解放された都市生活の主婦が、銀座で昼間にウインドー・ショッピングしているシーンを見て、第三者的に余暇時間の増大や生活様式の高度化などと片づけるのではなく、その生活者の立場から、自分の生活時間資源の配分として興じているシーンと解釈することである。

今まで生活者は家庭、学校、職場等外部環境の制約下で生活時間資源配分を決定されることが多かった。これからの成熟社会では生活者は自由となる時間が増大し、有限な生活時間資源を如何に利用しうかが意義ある生活の決めてとなってこよう。個性的で創造的な時間を過ごせる生活者の出現が期待されている。

・ダウンサイジング現象

コンピューターの世界では、半導体技術の急速な進歩で、大型機に代わり、パソコンや

ワークステーションなど小型機のシェアが高まってきており、これをダウンサイジング現象と称している。大型機中心は中央集権的な処理形態をとっているのに較べ、小型機は現場の利用を指向した分散処理が主体である。

一方企業組織においても、トップダウン一辺倒のマネジメントが消えつつある。特にトップの指図をもれなく忠実に実行するため、きめ細かにセグメント化が図られてきた組織でも、マーケットの変化に迅速に対応することが苦しくなりつつある。時々刻々変化するマーケットの動向に対して能動的追従を可能とする分散型組織へと移行してきている。特にコンピューター・ソフトの業界は、現場に多大な裁量権を持たせ実施している。これが進めば過去の没個性的な組織も、十人十色の顔へと変身し、ダイナミックな経営と多様な運営管理がなされていくものと思われる。

〈磨け!“際”技術〉

・社会教育の充実

わが国の学校教育は集団生活の協調性と落ちこぼれ学生の底上げをめざした教育方針をかかげ、平均的で標準化された学生を数多く生み出してきた。戦後の経済活動において品質の良い製品の生産に寄与し経済成長を支えてきたとされている。しかし近年の国際化時代の要求から異文化民族との交渉において、自我や創造性の発揮と自己主張及び他人との交渉、協調ラインの導き等能動的な態度がと

れる人間の出現が望まれてきている。このような時代の到来に合わせて、教育への期待は、制度や社会的な価値観を学ぶ活動主体の学校教育から、自らの意志や価値観に依拠して学び、偶発性や異質な者との遭遇を可能にする遊ぶ活動主体の社会教育へと拡がりつつある。

これからの教育は、国際社会で日本人がどんな環境下でもたくましくしたたかに、自分の能力を発揮できる人間を形成する場として強化されることになるだろう。過去に体験したことのない事象変化を積極的に取り上げ、学生にチャレンジさせ自分達で解決策を講じさせていく教育方法など、これらを可能にしてくれる社会教育の充実に期待が寄せられているところである。

・バーチャル・ライフのすすめ

外国の生活文化は、通り一遍の観光旅行や滞在型のリゾート体験程度ではなかなか理解できない。相手の生活様式、習慣等を受け入れて生活し、初めて、いくらか可能となるものの、理解できるまでには至らない。

そこで相手の世界に自分を持ち込み、相手の世界観で生活するバーチャル・ライフ（仮想体験）を提案したい。相手の立場、格好、くらし方等を相手のようにふるまって生活することである。自分の変装は、相手の見る目を変える以上に自分の意識変化を持たらし、自分がものの見方や考え方など、相手に近づくようになってくるからである。

〈練れ！ポリフォニーとハーモニーの美学〉

・江戸幕府の成功体験

わが国は、江戸幕府において閉鎖型であるものの社会の安定化に成功した経験を持っている。江戸時代は、主たる財源を天領からの上りと通行税に求めた小さな政府、制度改革も適宜着手、米作や植林事業等の技術移転、元禄文化や化政文化の栄え等を実績として残している。幕藩体制下セグメント化された地域、身分等の組織は、島国で自然的生活世界が制限され、鎖国で社会的生活世界も閉鎖され、その中で参勤交代による集団的トラベルやマルチハビテーションにより地域間交流、情報促進、活性化等が図られた。国家の枠組みが強固で閉鎖された社会において、細分された要素が協調して奏でたケースと言えよう。

日本はこの経験を、今度は世界へと拡げていく必要がある。地球的視野に立てば、自然的生活世界は閉鎖型のため、この経験を生かせるものもあろう。社会的生活世界は解放型のため、第一歩から取り組まなければならないだろう。21世紀に向かって、世界は新しい秩序の創出を模索し始めてきており、わが国は江戸幕府のポリフォニーとハーモニー（多重唱と調和）の成功体験を生かし世界に貢献していくことを望みたい。

・多様な要素が織り成す調和の街

今までの街づくりは機能性が優先され、中心市街地ではオフィス主体だったり、大都市近郊の衛星都市ではベッドタウンで埋めつく

されてしまうなど、単調な開発が実施されてきた。このようなアンバランスな開発が進んだ結果、人口構造や産業構造等が偏り、モノカルチャー的で偏った社会が形成され、コミュニティーの欠如、喪失等をもたらしてきた。

これからの街づくりには多様な機能と要素が多重に織り成す開発が求められてきている。新しいものと伝統的なもの、若年世代と高齢者、多様な産業の立地等によって一見まとまりがないようでありながら、人と人とのコミュニケーションを通じて街全体にネットワークが形成される街の出現が待ち望まれている。お互いがその街の生活者と言う共通認識を持って生活できる街、さらに次の世代にも調和のとれた街として受け継がせられる街の創造が期待されている。

〈三代目にエールを送る〉

わが国には絵一代、音二代、味三代という言い伝えがある。絵一代とは、画家は先天的に絵心ある人が大成し、次世代への継承はできない。音二代とは、音楽家は両親等を含めた周囲に音楽への理解があり、適切な教育・指導がなされてはじめて大成するということである。一方、味三代とは、味覚が親、子、孫三代かけて形成されることを示している。味覚文化は食文化の根幹をなし、生活文化の中枢として位置づけられ、家庭、国家、民族等の歴史的遺産つまり生活文化のシンボルとして表現されていることに意味がある。つま

り生活文化が三代以上かけて築かれることを言い表している。

第二次世界大戦後において、わが国の世代の流れを概観すると、無から有を創造してきた戦後一世グループは、敗戦で戦前の価値観を全面的に否定され、新しい価値観を模索しつつ経済復興を果たしてきた。次の戦後二世グループは、一世に価値観が確立されないまま、どこからともなく民主主義の価値観を植え付けられ消化不良をきたしながらも教育に精を出し、一世グループに手を引かれ経済大国めざし参加してきた。団塊世代を中心とするグループである。戦後三世グループは、経済大国化で物質的豊かさを十分享受しつつも、時代変化が激しく、価値観も多様化し、新たな目標を創出していかなければならなくなってきた。団塊ジュニアを中心とするグループであり、社会の主流になりつつある。生活文化は三代かけて形成されることを鑑みると、現在はその世代に入ったと言えよう。

日本は、戦前に経済発展めざし軍事大国化を図り、国際社会で孤立化を招いた苦い経験を持っている。戦後は銃を捨て、合わせて伝統文化を仕舞い、経済優先で盲目的に走ってきた。今度、経済大国から生活大国化を実現させることにより、名実ともに国際舞台の主要な仲間入りを果たすことになれば、この「生活大国」の目標設定はとりわけ意義深いこととなるだろう。